

第一章

ある日の午後。今日はもう講義はないし、バイトも入っていない。つまり、なんの予定もない残り半日を自由に楽しめるということ。せっかく予定もないし、くるみでも誘ってお出かけでもしようかな…と考えていたところに丁度くるみが現れた。

「花梨おつかれ〜！　ねえ、今日バイトない日だったよね!？」

「なんで私の予定把握してるの…？」

「あつたりまえじゃん〜♪花梨はあたしの親友なんだから！　…ていうかそんなことより！　ちよっと一緒に行きたいところあるの！　見てこれ！」

「ん〜？　…なにこれ」

くるみが目の前に差し出してきた画面を見ると、そこには顔の良い男の子の写真やプロフィールがずら〜と並んでいる。『舐め犬カフェ』と書いてあるけれど…舐め犬ってなに？

「花梨知らないの〜？　ほら、こういうことしてもらえるの♡」

くるみが画面をスクロールすると、店のサービス内容が細かく書かれてあった。どれどれ、と見てみると、『あなたのおまんこを舐め舐めするワン♡』という文章が目に入る。

「な…な、なにこれっ！　いくらなんでも普通こういうところに友達誘わないでしょ!？」

意味を理解した途端、顔にどんどん熱が集まっていく。くるみはたまに突拍子もないことをする時があるけれど、まさかここまでだったとは。

「えゝだってさあ、花梨全然彼氏つくる気配もないし…そもそも男の人苦手とか言うしゝ。だから、こういうところ行って男慣れした方がいいと思うの!」

「…えゝ？　いや、それはそうかも知れど…んゝ…」

「もゝゝ、うだうだ言わないの！　ほら、初回は半額だし、試しに行こう！　ね!」

くるみは私の持ち物をかばんにぼいぼい入れて勝手に帰り支度をする、半ば引きずるように舐め犬カフェへと連れて行った。

＊

「…ここが、舐め犬カフェ…」

見た目は普通の可愛らしいお店、といった感じで、ぱっと見いかかわしい感じはない。少し入りづらい店を想像していたけど、これならまだ大丈夫かも。

「さ、花梨行くよ！」

「あつ、ちょ…」

くるみは私の手を引き、店の中へと入った。中へ入るとすぐに、店員らしき男性に出迎えられる。

「いらっしやいませ！ 当店は初めてですか？」

「あつ、はい！ 初めてです！」

店員との会話はくるみに任せ、店内をきょろきょろと見回す。女性向け、というのもあってか清潔感のあるきれいな内装だ。ここへ来るまでも緊張していたけど、実際に入ってみると更に緊張してくる。

「…花梨！」

「あつ、なに？」

くるみに呼びかけられ、そちらに顔を向けると男の子の顔写真と名前がずらっと並んだパンフレットを見せられた。

「ここから一人選べるんだって！ 誰にする？ あたしはこの子にしちゃおう♡」

「えゝ…んゝと…どうしよう…」

パンフレットにざっと目を通す。ぱっと目についたのは、恭弥という男の人だった。ふわふわとした柔らかそうな茶髪に少し垂れ気味の目、にっこりと笑った笑顔が優しそうだし、この人なら大丈夫かも。

「じゃあ…この、恭弥さんで…。」

「かしこまりました。ではお部屋にご案内いたします。」

店員に連れられ、個室へと案内される。くるみとドアの前で分かれ、一人で部屋へと入った。カフェ、といっても、接客は個室で行うらしい。まあ、その方が安心ではあるけれど。しばらく座って待っていると、コンコンと扉をノックする音が聞こえてきた。

「あつ、は、はい！」

返事をする、がちゃつとドアが開き、恭弥さんが中へと入ってきた。写真で見るよりも整った容姿に、どきどきと胸が高鳴る。

「初めまして、ご主人様！ 選んでくれてありがとうございます♡」

「あつ、は、はじめまして…」

恭弥さんはふわふわとした犬の耳と首輪を身に着けていて、見た目もしっかり犬らしい。髪の毛もふわふわしているから、本当に犬みたいだ。

「隣、座っていいですか？」

「あつ、はい！」

私が頷くと、恭弥さんは隣に腰掛けてきた。腕と腕が触れ合い、思わずびくっと体が跳ねる。男の人とこんなに近づくことなんてないから、緊張してしまう。顔、赤くなっていないだろうか。

「ご主人様のお名前、聞いてもいい？」

恭弥さんは下から顔を覗き込むようにして尋ねてきた。少し上目遣いになったことで、更に可愛さが増している気がする。心臓の音がばくばくと大きく鳴り始める。

「あ、えっと…花梨、です…」

「花梨ちゃん…かわいい名前だね♡僕は恭弥っていうんだ。よろしくね？ ご主人様♡」

「恭弥さん…お、お願いします…」

「恭弥でいいよ？ 僕はご主人様の舐め犬なんだから、さんとか付けなくていいし、敬語も使わないで？」

「う…わかった…。きよ、きょうや…？」

私がそう呼び捨てすると、恭弥は満足そうににっこりと笑った。恭弥の手が膝の上を這い、私の手の甲へと重なる。そんな些細な刺激でさえ、慣れていない私にとっては大きな刺激になってしまう。

「ご主人様、こういうとこ初めてなの？」

「あっ、う、うん…／＼」

「そうなんだあ…ご主人様の初めての犬になれて嬉しいな♡」

じっと瞳を見つめられると、どきどきしてつい目を逸らしてしまう。すると、恭弥の手に顎を掴まれぐいっと上を向かされる。とろんと垂れた恭弥の目に見つ

められ、これからエッチなことをされるんだと思うと、じゅわつと秘部が熱くなってくる。

「あ、あ♡っふ、お♡お♡♡」

恭弥の手のひらが膝からだんだんと上がっていき、スカートの中へと侵入していく。パンツの上から割れ目に触れられ、そのままクリトリスのてっぺんへと指先が移動していく。突起の先っぽをすりすりとは擦られるとふわふわした気持ちよさが襲ってくる。

「ご主人様、もうぐちよぐちよになってる♡ねえ…ぺろぺろしていい？」

恭弥がぺろっと赤い舌を見せつけながら、そう尋ねてくる。

「えっ♡あ、♡い、いよ…♡」

私がそう答えると、恭弥はソファから降り、私の足元にしゃがみこんだ。恭弥は私の脚を大きくM字に開いてパンツを脱がせると、秘部全体を大きな舌で舐め上げた。

「っあああ♡きもち♡こしっ、びりびり、しちやう♡♡」

秘部の入り口からクリトリスの先端までを何度も舌で往復され、腰がびくびく

と跳ねる。恭弥は唇をすぼめると、じゅるじゅるとクリトリスを吸い上げながら舌先でちろちろと先端を舐め始めた。

「…おっ…：…♡」

ぬるぬるとした柔らかい舌でクリトリスを何度も擦られ、目の前がチカチカとする。性的な経験がほぼない私にとって、その刺激はあまりにも強すぎる。気持ちいいけど辛い、そんなもどかしい快感がぞわぞわと体を駆け巡る。

「あっ…：♡きよ、や…：♡あたま、♡おかしくなっちゃう…：♡♡」

息を切らしながらそう訴えても、恭弥は上目づかいでにこしながらクリトリスを吸い続ける。腰をくねらせても恭弥の両手にながちり固定されていて快感を逃がすことができない。恭弥はすっかり皮が剥けてしまったクリトリスをこれ見よがしにずるずると吸い上げてくる。腰が動かせない代わりに、背中がぐつとのけ反る。口は半開きになり、そこから今まで出したことのないような汚い喘ぎ声漏れ出てくる。

「お、おお♡ん、♡っほお♡ふうっ♡んっ♡」

恭弥の舌の動きがどんどん速くなる。舌先でべしべしとクリトリスをピンタさ

れ、開いた口から舌がだらりと伸びてしまう。

「あっ♡あゝ♡ああ、あっ♡♡もっ、やめてえっ♡♡」

口ではやめてと連呼しているのに、両手は無意識に恭弥の頭を掴み、クリトリスへと押し付けてしまう。そうすると、恭弥は更に強くクリトリスに吸い付き、だらだらと垂れる愛液ごとじゅるっと啜る。先端を集中的に責められると、どんな快感が一点に溜まっていき、絶頂へと導かれてしまう。恭弥はそれに気が付いているようで、私が達しそうになると舌の動きを緩め、落ち着いたところにまた荒っぽく舐めまわしてくる。何度も絶頂直前を繰り返され、下腹部が重苦しいほど切なく疼いている。

「ふうっ…♡ほ、お♡っおおお♡も、やあ♡イキたいのおっ♡♡」

私がそう言うと、恭弥の舌の動きが更にねちっこくなっていく。私を絶頂させようという意思をもった責めだ。自分から望んだはずなのに、いざ激しく責められると、強すぎる快楽に自分がおかしくなってしまうのではと恐怖すら感じてしまう。

「あ、あああゝゝ♡いく、イ、っくうう♡♡♡」

今まで体験したことのない大きな快楽の波が押し寄せ、体が激しく跳ねる。口から垂れた舌も、足先も、ピンっと伸びてしまっている。ピクピクと長く続く絶頂感の余韻の中、ぷしゅうと潮が噴き出した。

「あ、ううああ…♡♡」

「あはは♡ご主人様だらしな顔♡どう？ 僕のベロ気持ちよかった？」

「あ、♡き、もち、よかった…♡」

「…ねえ、ご主人様？ 僕気づいちゃったんだけどさあ…」

恭弥が体を起こし、私の耳元へ唇を寄せる。

「ご主人様ってマゾ…だよな？」

「…えっ…」

先ほどまでと全く違うその低い声に、思わずびくつと体が跳ねる。まるで大型犬みたいに可愛かった恭弥が、今はオオカミのように見える。全てを見透かしているような鋭い瞳とにやりと上がった口角に、これは本当に恭弥なの？ と疑ってしまう。

「やっぱり〜？ 俺分かつちゃうんだよねえ♡ご主人様、ほんととはもったいじめ

「あら、いたんじやない？　こうやって♡」

「あ、ああ♡」

絶頂したばかりのクリトリスをぎゅっと抓られ、大きな声を上げてしまう。そんな私を恭弥はにやにやと笑いながら見下ろしてくる。

「ほら♡すっごい嬉しそうな顔してる♡ほんと俺に服従して、ご主人様って呼びたいんじゃないの？」

「なっ…別に、そんなんじやっ…♡」

「ほんとかなあ？　なんかさっきよりエッチなお汁でぐちゅぐちゅになってない？」

ぐちゅぐちゅぐちゅっ

「あ、あああ♡♡」

ぬるぬるになった膣内を恭弥の指でかき混ぜられ、ぷしゅっと潮が噴き出る。

「ほら、自分がドスケベなマゾだって認めなよ♡」

「あ、ああ、あゝゝ♡わか、わかった♡みと、めるからあ♡も、やめて…♡」

激しく責め立てられればもう拒否する気力も沸かず、恭弥の腕にしがみつきな

がらそう懇願してしまう。

「あはは♡じゃあ、今日から花梨ちゃんは俺専用の発情メス猫ね？　で、俺がご主人様♡わかった？」

「わか、った…っ、あ…♡イ、っく…っ♡」

ずぼっと引き抜かれた指がそのままクリトリスへと移り、その先端を勢いよく擦られ呆気なく絶頂してしまう。恭弥はうっとりとした笑みを浮かべると、私の頬をそっと撫でた。

「俺ときもちゝことたつくさんしようね？　マゾ猫ちゃん♡」